プロティノスの
「生命あるものとは何か、人間とは何か」I-1-(53)

1

1 快と不快、恐怖と大胆、欲望と件をそして苦痛、これらはどの部分にぞくするのであろうか(『法律』X897a)

2 それらは、魂にか、あるいは肉体を使用している魂にか、それとも魂と肉から成る第三のものにか、そのいずれに属するのであろう

4 すなわち、それは(魂と肉体の)混合体か、それとも両者の混合から生じた別のものかの、いずれかである

6 そこで、われわれは思考の働きやドクサ(思いなし:δόξα)についても、それらをもつものとパテー(情念:πάθος)をもつものは同じものなのか

9 また、ノエーシス(直知:νόησις作用)についても、それがどのようにして行なわれ、何がそれを行なうのかを考察するとともに、さらにその考察しているものそれ自体が、

すなわち、それらの問題を調べて判定を下すものが、いったい何であるかを考察しなければならないことになる

13 つまり、情念は或る種の感覚であるか、感覚なしには生じえないものであるから、この問題の検討から始めるのが妥当というわけである

4 ——なお、この第三のものは、さらに二通りの意味で語られる

5 ——それにまた、右のパテーマタ(諸情態:πάθημα)に基づいて生じるものとしてのプラトメナ(行為:προμήθεια:はからい)やドクサゾメナ(思いなし:δοξάζειν)についても、同じことが言えるであろう

7 それとも或る種の思考の働きや思いなしをもつものは情念をもつものと同じだが、別の思考の働きや思いなしをもつものは情念をもつものと別なのかを探求しなければならないことになる

12 しかし、それよりも先に、感覚作用を行なうものは何か

2

1 しかし、まず魂を取り上げて、魂と魂の本質は別なのかどうか考察する必要があるであろう

1 というのも、もし魂とその本質が別であれば、魂は合成されたものであることになり、そのばあいには、もはや、魂がすでに述べた諸情念を受容したり所有したりするのも不合理ではないことになるであろうし

一般に、魂はよりすぐれたヘクシス(状態:ἕξις)やディアテシス(様態:διάθεσις)を受けとったり、より劣った状態や様態を受けとったりすることになるからである

6 これに対して、もし魂と魂の本質が同じであれば、魂は或る種のエイドス(形相)であることになるであろうし、その魂としての形相は、自分が他に与えることのできる作用はすべてこれを受けとることなく、

自己自身のなかには、自己自身にもともとそなわっている働きのみをもっていることになるであろう

というのも、もしその魂としての形相がそのようなものであれば、「それはまた不死でもある」といってまちがいではないからである

9 つまり、不死で亡ぶことのないものは、何らかの意味で自己自身の或るものを他に与えはするけれども、それ自身は、他から何も受けとることはないのだから

外からの影響を受けないものでなければならないわけである

14 してみると、虞れを抱くのは、外からの影響を受けとるものであることにならなければならない

15 なぜなら、恐ろしいもののないものに大胆さがそなわっていることなど、ありえようか

17 欲望は、肉体が空になったり充足されたりする時に、その肉体を通して満足させられるもので、その空になったり充足されたりするものは(形相とは)別のものなのである

18 真実在に属するものは、他と混じり或ることのないものなのである

20 もしそのようなことがあれば、それはたちまちにして<それがまさにそれであるところのもの>でないことになってしまうであろう

21 なお、苦痛も、その魂としての形相からは縁遠いものであろう

22 本質において単一なものは自足的であり、いわば自己自身の本質のなかにとどまっているのである

23 なお、その魂にはいかなるものも

近づくことはないのに、何が付け加えられれば快さを感じるのであろうか

26 さらにまた、その魂としての形相は感覚することもなければ、思考の働きや思いなしやその形相にかかわることもないであろう

28 だが、直知作用についてはどうであろうか

29 それにまた、清浄な快楽(『ピレボス』52c)についても純粋に自己自身のみとなっている魂がそのような快楽を味わうのかどうか、調べてみる必要があるであろう

——「少なくとも議論がこのような推論を許すならば」という条件つきのことであるが——

——この働きが何であるかについては、議論の進展がこれを明らかにするはずである——

——ただし、自分より先にあるものから、すなわち、自分よりすぐれているもので、自分がそれから切り離されていないものから受けとるものは別である——

13 まことにこの種のものは、外的なものを何ひとつとして受けとることのないものであるのに、どうしてまた恐れたりすることなどありえようか

15 とすると、外からの影響を受けないものは大胆でもないことになる

16 それにまた、欲望がそなわっていることも、どうしてありえようか

17 だが、魂としての形相が自分とはベルのものに混じり或ることなど、どうしてありえようか

19 他方、その形相が他のなにかを取り入れることなども、どうしてありえようか

21 なお、苦痛も、その魂としての形相からは縁遠いものであろう

21 というのも、その魂は、どうして、また何を対象として苦しむのであろうか

——善きものでさえも——

24 その魂は常に<まさにそれであるところのもの>としてあるのである

27 なぜなら、感覚とは物体の形や状態の受領であり(アリストテレス『魂について』II 12,424a18)、思考の働きと思いなしは、感覚に基づいているからである

28 この働きを魂のものと認めるべきであるのかどうか、調べてみる必要がある

3

1 いや、しかし、その必要はないであろう

4 そしてこのばあいには、魂は肉体をいわば道具として使用するのだから、技術家たちが自分の使用する道具の状態の影響を受けないように、魂も肉体からの影響を受けるように強いられることはないのである

9 なぜなら、眼を用いることが、見ることでもあるからである

11 そこで結局、魂がその道具の世話をみようと努めることになって、その魂に欲望が生ずることにもなるのである

12 肉体が別の肉体に、自己自身に固有な事柄を分与することはあるかもしれない

14 というのも、「肉体が魂にそれらを分与する」ということは、いわば「或るものが影響を受けると、それとはまったく別の或るものが影響を受けることになる」と言うに等しいからである

17 とにかく、魂に肉体の使用者としての立場を与えるい人は、魂と肉体を別ものとして分けているからである

19 おそらく、魂と肉体は混じり合っていたのであろう

そこでは魂と肉体がいわば融合していたのか、

それとも魂は「肉体に織り込まれていた」ようになっていたのか、

もしくは肉体から分離していない形相のようになっていたのか、

あるいは舵取りのように肉体を掴んでいる形相だったのか、

それともその形相の或る部分は肉体が分離しているが、別の部分は分離していなかったのか、

22つまり、私が言いたいのは、「形相の或る部分は肉体から分離していて、それが肉体を使用する部分なのであるが、別の部分は何らかの仕方で肉体と混じり合っており、その部分は序列において使用されるものの立場へと堕ちこんでもいる

1 なぜなら、魂が肉体より先にあろうと肉体のなかにあろうと、「肉体と魂の結合した全体が生命あるものと呼ばれる(『パイドロス』246c5)」のだから、魂を肉体のなかに据えて考察する必要があるからである

7 だが、もし魂が外からの影響を知るためには、道具(感覚器官)を用いなければならないとすると、しかもその影響を知るのは感覚を通してであるとすると、おそらく魂が感覚をもつのは必然であることになるであろう

10 しかし、見ることに障害があることもあり、そのばあいには、不快とか苦痛とか、身体全体にわたって生起する事柄一般の影響を受けることにもなるのである

12 しかし、それらの情念は、どのようにして肉体から魂に達するのであろうか

13 しかし、肉体はそれらをどのようにして魂に分与するのであろうか

15 なぜなら、「一方のものは使用するものであり、他方のものはそれによって使用されるものである」という事実関係がある限り、両者はたがいに別のものだからである

18 しかし、哲学によって魂の分離が行なわれる以前には、魂と肉体との関係はどのようになっていたのであろうか

19 しかし、もし混じり合っていたのであれば、

そのいずれかだったであろう

23 だから哲学は、この肉体と混じり合っている部分をも肉体を使用する部分へと向けかえるとともに、肉体を使用する部分を絶対に必要とはみなされない限り、それの使用する肉体から遠ざけて、その部分が常に肉体を使用するとは限らないようにしなければならない」ということなのである

4

1 そこで、「魂は肉体と混じり合っている」とみなすことにしてみよう

3 つまり、肉体は生命にあずかることによって、より善きものとなるが、魂のほうは死とアロギアー(不条理)にあずかることによって、より劣ったものとなるわけである

5 事実はむしろ反対で、肉体が生命を得ることによって、その感覚作用や感覚作用に基づく諸情念にあずかるのであろう

6 だからこそまた、その肉体は欲求を持つことにもなるのであるし

自己自身のことを気づかって、恐れを抱くことにもなるであろう

10 だが、さらにわれわれは、この魂と肉体の混合の仕方についても、調べてみなければならない

11 それはちょうど、白さと線のように、「まったく別のあり方をしているものが混じり合っている」と言うようなものなのである

14 織り込まれているものが影響を受けないものであることは可能であるし、

ちょうど光がまたそうであるように、肉体に浸透している魂が、肉体のもつ諸情態の影響をまったく受けないことも可能なのであって、

もし肉体の全体にわたって織り込まれているとすれば、特にそうなのである

18 しかし、魂は「形相が素材のなかにある」というような意味で肉体のなかにあるのであろうか

21 だが、これに対して、もしその魂を鉄の上に刻印された斧のスケーマ(形)のようなものとすれば

23 われわれは、すべてのコイナ・パテー(共通経験)をむしろ肉体のほうに帰属せしめることになるであろう

パトスは、動詞πάσχειν の示すとおり、「なされる、作用を受ける、受動する」ということで、そこから「災いを受ける、影響を受ける、経験する」、「印象、気持ち、感情」等々、多岐にわたる意味をもったことばとして用いられるようになった

25 というのも、「魂が布を織る」と言うのは、(アリストテレスも言うように)不合理なことであるし、もしそうであれば、「魂が欲望を起こしたり、苦しみを味わったりする」と言うのも、不合理だからである

1 しかし、もし混じり合っているのであれば、より劣ったものすなわち肉体は、より善きものとなり、他方のものすなわち魂は、より劣ったものとなるであろう

4 とすると、何らかの意味で生命を奪われたもの(魂)が、いったいどのようにして、感覚作用を加え持つことができるのであろうか

——なぜなら、その肉体は欲求の対象となっているものによって、快楽を享受しようとするであろうから——

8 なぜなら、その肉体は快楽を得られないこともあるであろうし、亡ぶこともあるであろうから

10 おそらく、この両者の混合は、不可能であろう

13 他方、「(魂が肉体に)織りこまれている」という(プラトンの)ことばは、「織り込まれているものを同じ影響を受けるものにする」という意味で言われているのではない

17 したがって、魂は、「肉体に織り込まれている」ことのゆえに「肉体の諸情態に従属する」ということにはならないであろう(『ティマイオス』36e)

19 まず、魂がウーシアー(真実在)であるとすると、その魂は肉体から分離しうる形相のようなものであることになるであろうし、

肉体の使用者としての立場を占めるには、より適切なものであることになるであろう

——このばあいには複合体としての斧が、つまり、そのように形づくられた鉄が、その形によってではあるけれども、自らの機能をはたすことになるわけであるが——

24 ただし、これこれしかじかの質の肉体に、つまり、「自然が形成し、魂の道具となりうる、可能的に生きている物体(アリストテレス『魂について』II 1,412a 27-28)に、ではあるが…

27 むしろ、「生命あるものが、そのような情態をもつ」と考えるのが当然であろう

5

1 しかし、われわれはその生命あるものを、次のいずれかであると言わなければならない

3 だが、生命あるものがそのいずれのあり方をしていようと、魂のほうは

「他のもの(肉体)に対する特定の情態の原因者でありながら、自らは情態に影響されないものとしての立場を維持している」のか、

それとも「自分も(肉体と)一緒に情態の影響を受ける」のかの、いずれかでなければならないのである

8 しかし、これこれしかじかの肉体のほうは、後に考察することにして、魂と肉体から合成されたものは、たとえばどのようにして苦痛を感じるのであろうか

10 しかし(この説明では)、その感覚がどのようにして生じるのか、明らかにされてはいない

15 しかし、そのように考えても、何がその思いなしをもつのであるか、魂がもつのであるか、それとも合成されたものがもつのであるか、まだ明らかではない

17 なぜなら、事実、現に思いなしがあっても、それに苦痛がまったく伴わないことも可能であるし、また、「軽んじられている」という思いなしがあっても、それに怒りが伴わないことも、さらにまた、善きことへの思いなしがあっても、それに対する欲求が刺激されないこともありうるからである

22 欲望は魂の欲望を司る部分に属し、怒りは魂の気概を司る部分に、そして一般に、或る外的なものへと向かう動は、魂の欲求を司る部分に属するからであろうか(アリストテレス『魂について』III 9,432b6)

24 それとも、血液や胆汁が沸き立ち、肉体がなんらかの状態におかれることによって、たとえば性愛へというように欲求が刺激されねばならないのだから、それらの情態は、肉体のものでもあるのであろうか

30 しかし、人が性愛への欲求をもつばあい、或る意味では、魂の欲望を司る部分も、それを欲しも止めるのではあろうが、しかし、その欲望をもつ者は人間なのである

32 はたして、人間がその欲望の発端を切り、魂の欲望を司る部分がこれにつづくのであろうか

34 むしろ、欲望の発端を切るのは、魂の欲望を司る部分のほうであろう

1 すなわち、それは「これこれしかじかの肉体である」か、それとも「(魂と肉体が)共有するもの」か、あるいは「魂と肉体から成っているけれども、両者とは別の第三のものである」かの、いずれかであると言わなければならないのである(『アルキビアデス』130a 7-c7)

5 そして、もし情態の影響を受けるとすると、それは肉体のもつ情態と同じ情態の影響を受けるのか、それとも類似した情態の影響を受けるのかの、いずれかでなければならないのであって、

たとえば生命あるものの欲求することと、魂の欲望を司る部分の行なったり受けたりする作用の異なっているばあいが、後者に相当するのである

9 はたして、はじめに肉体が苦痛の状態におかれ、その情態が感覚にはいりこみ、最後にその感覚が魂に達するからであろうか

11 しかし、苦痛は、「或る種の災いが、自分や自分の親族たちにふりかかっている」との思いなしや判断にその起源をもっていて、

次にそのような思いなしや判断が基になって、苦痛への変化が、肉体や一般に生命或る者の全体に起こるのであろうか

16 それに、或る人をめぐる災いについての思いなしは、苦痛という情態をもってはいないのである

21 とすると、それらの諸情態は、どのような意味で、魂と肉体に共通するのであろうか

23 しかし、もしそうだとすると、それらの情態は、もはや共通するものではなくて、魂のみのものとなるであろう

27 だが、善なるものへの欲求は、共通する情態ではなくて、魂のみのものでなし、他の情態についても、同様なのであって、或る種の言論は、すべての情態を共通するものに帰属せしめることを許さないのである

32 だが、人間はどのようにして、その欲望をもつのであろうか

33 しかし、魂の欲望を司る部分が刺激されなければ、いったい人間はどのようにして、欲望するのであろうか

35 しかし、その前に、肉体がこれに相応する状態におかれていなければ、魂の欲望を司る部分は、どこから欲望の発端を切るのであろうか

6

1 しかしながら、おそらく、一般的に、「魂の諸能力が現にあるから、それらの能力を所有する者が、それらの能力にしたがって活動するものとなるのである

3 しかし、もしそうだとすると、生命あるものが作用を受けているばあい、(それにより生じる)情念と活動は、所有者のものであって、合成されたもの(人間)に生を与える生の原因者(魂)それ自体は、情念から自由であることになる

8 あるいは、合成されたものの生は、魂の生ではないことになるであろうし、それにまた、(魂の)感覚能力が感覚するのではなくて、その能力の所有者が感覚するのだということにもなるであろう

11 「感覚能力が現にあるばあいに、その能力が現存することによって、合成されたものが何であれ感覚の対象となるものを感覚するのであろう」

2 だが、それらの能力は、力をその所有者に供給するのみで、それ自体は動かされることはない」と言ったほうがよいであろう

6 だが、もしそうだとすると、その生もまったく魂のものではなくて、合成されたもののものであることになるであろう

10 しかしながら、もし感覚が肉体を通って最終的には魂に至る動であれば(『ティマイオス』43c)、どうして魂が感覚しないことがあろうか

14 しかしながら、もしその能力が刺激されなければ、すなわちも魂の能力も(合成された人間に)算入されていなければ、なおも、どうして感覚するものが合成されたものでありえようか

7

1 では、むしろ、「合成されたものがあるのは、魂が現にあるからである」としてみよう

7 しかし、そのばあい、どうしてわれわれが感覚することになるのであろうか

10 なお、魂に固有な知覚能力は、直接に感性的なものを対象とするのではなくて、むしろ、感覚によって生命あるものに生じる印影を把握するのでなければならないのである

12 それゆえ、外的なものを対象とする感覚は、魂のこの知覚の影であって、この知覚はウーシアー(実有性)において、より真なるものであり、ただエイデー(形相)のみを外的な影響を交えずに純粋に把握するテオーリアー(観照活動:θεωρία)なのである

14 まことにこれらの形相に基づいて

思考や思いなしや直知の働きは、その活動を行うのであって、ここにおいてこそ、われわれは何にもましてわれわれなのである

18 だが、その全体を生命あるものと呼んでも、なんら支障はないであろう

21 これに対して、下位の部分は獅子の類であり、全体的に見て種々雑多な獣なのである(『国家』IX 590a9~b1,588c7)

1 ただし、そのばあい、「魂はこれこれしかじかの魂として、自己自身をその合成されたものもしくは肉体に与えるのではなくて、

これこれしかじかの肉体と自己自身によって与えられたいわば光のようなものから、自分とは別の新たな生命あるものを作るのであって、

感覚その他生命あるものの経験と言われているものは、すべてこの生命あるものに属する」とするのである

8 おそらく、多くの要素から成る人間の存在全体のなかには、たとえわれわれにより貴重なものがそなわっているとしても、われわれは、これこれしかじかの生命あるものから離されているのではないからであろう

11 なぜなら、それらの印影はすでにノエータ(知性の対象)となっているからである

θεωρεῖν: 観るおよびその同族語としての名詞、形容詞

——魂のみがこれらの形相から、生命あるものの指導権を得るのであるが——

17 これに対して、それらよりも先にあるものは、われわれのものなのであって、実にわれわれはここから上へとのびている部分であり、生命あるものの上に君臨しているのである

19 ただし、その下位の部分は(肉体と)混じり合っているので、「ここから」が、思うに、真の人間なのである

21 つまり、人間と思惟する能力をもった魂とが同じである以上、われわれが思惟する時には、その思惟は魂の活動なのであるから、われわれが思惟していることになるのである

8

1 だが、われわれはヌース(知性)に対しては、どのように関係しているのであろうか

2 われわれはその知性をも、われわれの上にあるものとして所有しているのである

5 つまり、「共通のものとして」と言うのは、それが部分に分けられない一つのもので、いたるところに同じものとして存在しているからであり、「固有のものとして」と言うのは、各人がまたそれの全体を第一義的な意味での魂のなかに所有してもいるからである

7 すなわち、魂のなかでは、いわば開かれ・分けられたものとして所有し、知性のなかではすべてを一括して所有しているのである

10 われわれは神を、知性的なものや真に有るものを超えているものとして所有しているのである

18 そして、共有するもののなかにある感覚が、魂の第一の影像であり、次に、その感覚能力に魂のエイドス(種類)と称せられる他のあらゆる能力が次から次へと連なり、最後に生殖能力や生長力に至って、

すなわち、一般に製作する魂(宇宙霊)とは別のものを産出する力(ピュシス)に至って終わるのであって、その際、製作する魂自体は、産出されるものの方を向いているのである

1 ただし、私の言う「知性」とは、魂が知性に由来するものの一つとして持っているヘクシス(状態:ἕξις)のことではなくて、まさに知性そのもののことではあるが…

2 だが、そのばあい、われわれはその知性を共通のものとして所有しているのか、あるいは固有のものとして所有しているのか、それとも万人に共通のものとしても各人に固有のものとしても所有しているのか、そのいずれかである

7 それゆえ、われわれは形相も、二通りの仕方で所有していることになるであろう

9 だが、「神」については、どうであろうか

9 われわれは神をどのようにして所有しているのであろうか

10 そしてわれわれは、この神から数えて第三の位置を占め、プラトンのことばによれば、上方の「不可分な魂」と「肉体の領域にある分割可能な魂」とから成っているのであるが、

後者は次のような理由で、すなわち「魂は実際には一つであるけれども、万有の全体に自己自身を与えるのであるから、生命あるもののそれぞれが量のあるものである以上、その肉体の大きさに自らを与えることになる」という理由で、

いや、むしろ、「魂は肉体を照らし、自己自身と肉体から生命あるものをつくるのではなくて、

自己自身はとどまっていながら、ちょうど、一つの顔が多くの鏡に映って見えるように、自分の影像を肉体に与えて生命あるものをつくるのであるから、自己自身が諸肉体に現在しているように見える」という理由で、

「肉体の領域にある分割可能な魂」と言われていると考えなければならないのである

9

1 それゆえ、われわれのあの上位の魂(文脈から言えば宇宙霊であるが、この表現から見れば、人間のもつ肉体とは係らない高度の魂)は、その本性において、人が行なったり、こうむったりする劣悪な事柄の責めから解放されていることになるであろう

5 だが、もし思いなしや思考が魂のものであれば、魂はどのようにして過ちから自由でありうるのであろうか

7 いや、むしろ、劣悪な事柄は、われわれが劣ったものによって

つまり、欲望とか怒りとか劣悪な影像とかによって打ち負かされた時に行われるのである

10 つまり、われわれは劣ったものに説得されて行動を起こしたのであって、それはちょうど感覚領域において、(魂と肉体の)共有するものの感覚が、魂の思考能力の判定を待たなければ、誤って見ることになるようなものなのである

12 したがって、過ちを犯すことはないのである

14 あるいは、「われわれのなかにある知性的なものに」と言ったほうがよいかもしれない

17 かくして、われわれは共有するものと(魂のみに)固有のものとを、「活動に際して肉体を必要としないものは、すべて魂に固有なものであるが、共有するものは、肉体にかかわりのあるもので、肉体なしにはありえない」という点で、区別したのである

19 そして思考は

感覚からもたらされる印影を判定する時には、同時に形相を観るのであり、しかも、いわば直接的な知覚によるがごとくにして観るのである

24 それゆえ、その魂は自己自身を注視し、自己自身のなかに憩いながら、少しも乱れることはないであろう

24 われわれのなかにあらわれる諸変化や擾乱(『パイドン』66d6)は、すでに述べられたように、われわれに結びつけられているものから、そして共有するものの

諸情態から生ずるのである

2 なぜなら、すでに述べられたように、それらの劣悪な事柄は、生命あるものに、つまり(魂と肉体の)共有するものに関連しているからである

6 というのも、偽りの思いなしがあり、その思いなしに基づいて、数々の劣悪な事柄が行なわれるからである(『テアイテトス』189b-190e)

——というのも、われわれのなかには、多くの要素があるからであるが——

9 そして、偽りの思考と言われているものは、実際にはパンタシアー(想念)なのであって、魂の思考能力の判定をつことはしないのである

12 だが、これに対して、知性の方は、対象に触れたか触れなかったかの、いずれかである

13 いや、むしろ、「われわれが知性のなかにあるノエートン(知的なもの)に触れたか触れなかったの、いずれかである」と言うべきであろう

15 なぜなら、われわれはその知的なものを所有しかつ手元にあるものとしては所有していないことが可能だからである(『テアイテトス』198d7)

——少なくとも、厳密な意味で真正の魂に属する思考であれば——

22 というのも、真正の思考は直知の活動であるし、外的なものと内的なものとの間には、しばしば類似性と共同関係があるからである

——たとえそれが何であろうと——

10

1 しかしながら、もし「われわれ」がその魂であり、「われわれ」がそれらの情念の影響を受けるのであれば、その魂がそれらの情念の影響を受けることになるであろうし、それにまた、「われわれ」の行なっていることは、その魂が行なっていることでもあることになるであろう

4 なぜなら、われわれは、「われわれの肉体の受ける影響を、われわれも受ける」と主張してもいるからである

6 すなわち、(われわれのなかにある)「獣」が加算されているばあいと、すでにそれを超えているばあいとがそれで、「獣」とは、生命を与えられた肉体のことである

11 ——というのは、その魂が肉体から完全に離れると、その魂から照らされていた低次の魂も、その魂につづいて立ち去ってしまうからである

13 なぜなら、共有するものは、数々の悪徳をもっているからである

14 だが、ピリアイ(知性界の愛:φιλία)は何に属するのであろうか

3 いや、しかし、「共有するものは(われわれであなくて)われわれのものであり、われわれがまだ肉体から分離していない時には、とりわけそうである」と主張してもいるからである

6 それゆえ、「われわれ」には、二通りの意味があることになるであろう

8 そして真正の人間は、その「獣」とは別で、それら獣的なもののもつ諸情念から浄化され、直知活動の領域の諸徳を所有しているのであって、

まことにこれらの徳こそ、肉体から分離している魂のなかに、すなわち感性界にある時にでも肉体から分離しかつ分離しうる魂のなかに、直接に座を占めているのである

12 ——これに対して、プロネーシス(叡智)によらず、習慣と修練によって生ずる諸徳(市民的な徳)は、共有するものに属するのである

13 つまり、妬みも羨みも哀れみも、ともにこの共有するものに属するのである

15 その或るものは共有するものに属し、別の或るものは内なる人間に属するのである

11

1 だが、われわれが、子供の時には、合成されたものに由来する諸方が活動していて、上位のものからの光は、その合成されたものにはほとんど達しないのである

5 しかし、そうすると、どうであろうか

7 しかし、たとえそれも「われわれ」ではあっても、まず、それを覚知しなければならないのである

9 だが、生命あるものは、どのようにして(自分のなかに)獣をもっているのであろうか

11 つまり、その部分は、たとえそこにあっても、獣にそなわっているのではないのであって、獣は肉体にそなわった魂の影を意識しているにすぎないのである

14 だが、もし人間の魂が獣のなかにはいりこむことはなかったとすると、獣は全霊からの照射によってこれこれしかじかの生命あるものとなっているものであることになるであろう

2 そして、その光がわれわれに作用を及ぼさない時には、その作用は上に向けられているのであって、それが中間的な部分に到達した時に、はじめて、われわれに作用を及ぼすことになるのである

5 その中間的な部分の先(上位)にあるものも、われわれではないのであろうか

7 つまりわれわれは、自分の持っているもののすべてをいつでも使用しているわけではなくて、

それらを使用するためには、まず、その中間的な部分を上位のものもしくはそれと反対のものへと、あるいは<われわれが能力もしくは所有の状態から現実の活動へと導くもの(アリストテレス『魂について』II 5,417a32-b10)>へと向けて据える必要があるわけである

10 もし言われているように、獣のなかに罪を犯した人びとの魂があるとしても、その魂の分離しうる部分は、獣のものとなっているのではない

12 だから獣は、いわば魂の影によって質を与えられたこれこれしかじかの肉体にすぎないのである

12

1 だが、もしその魂が過ちを犯すことのないものであれば、どうして罰があるのであろうか

2 なぜなら、そのような主張は、次の説に、つまり、「魂は過ちを犯したり、正しくふるまったり、冥府で罰を受けたり、或る肉体から別の肉体に宿りなおしたりする」という説にまったく合わないからである

6 すなわち、魂に過ちを犯すことのないものという立場を与える説は、魂と魂の本質が同じであると主張することによって、魂をまったく単一なものとみなしていたのであるが、

魂に過ちを犯すという立場を与える説は、魂を編み合わされたものとみなし、その魂に忌まわしい諸情態をもつ別のエイドス(種類)の魂をも付け加えているのである

12 そしてプラトンも、この観点に立って、「なぜなら、われわれは海神グラウコスを見ている人びとのようにして、魂を観ているのだから」と述べているのである

18 それゆえ、魂の生その他の活動と懲らしめを受けるものとは、それぞれ別の者である事になるであろうし、

魂の退出と分離は、単に特定の肉体からのそれであるばかりでなく、すべての付着物からのそれでもあることになるであろう

20 いや、むしろ、生成は全体的に見て、別の種類の魂に属するものなのである

22 それは、すでに述べられたとおり、魂の下降によって起こるのであって、魂(宇宙魂)が下に傾いている時に、その魂から下降する別種の魂(ピュシス)が生じるのである

23 それに、魂の下への傾きが、どうして(その魂の)過ちではないのであろうか

25 それはスキアー(影)も過ちではなく、その責めは照らされているものにあるのと同じである

26 だから、「魂に照らされたものが、その魂とともに生きる」という意味で、「魂が下降する」とか「傾く」と言われているのである

30 それに、魂が全体としあの知性界に目を向けているばあいには、影像はもはや存在しないのである

33 しかし、とにかく彼は、ヘラクレスを二つに分けたのである

35 すなわち、「ヘラクレスは、実践面では卓越した人であり、その立派さと善さのゆえに神たるにふさわしい人とみなされていた

2 いや、魂は過ちを犯すことのないものではあるまい

5 かくして、人はどちらか自分の好む説の方に賛成しなければならなくなるが…、

しかし、おそらく、人はそのどちらにも矛盾しない考え方を見出すことができるであろう

9 それゆえ、その魂自体が合成されたもの・あらゆる要素から成るものとなり、そして、事実、その魂の全体が外からの影響を受けることにもなるのであって、

過ちを犯すのはその合成体であり、プラトンの言う「罰を受けるもの」とは、その合成体のことであって、あの単一なもの(としての魂)のことではないのである

15 しかし他方、彼は、「人が魂の本来の姿を観ようとするのなら、いろいろな付着物を叩いて払い落としたうえで、

哲学という、魂にそなわる知への希求に目を向け、魂が何を把握し、何と同族であることによって、まさにそれであるところのものとしてあるのかを見なければならない」と述べているのである(『国家』X 611 d7-612a5)

20 というのも、事実、付着は生成の行程において行なわれるからである

21 だが、生成は、どのようにして行なわれるのであろうか

23 すると、はたして魂は、自らの影像を見捨ててしまうのであろうか

25 もし魂の下への傾きが、下の世界への照射であれば、それは過ちではないであろう

26 というのは、もし照らされるものがなければ、魂は照らすすべをもたなかったはずだからである

28 それゆえ魂は、自分の影像を受け取るものが近くにない時には、その影像を見捨てるけれども、しかし、その影像を「切り捨てる」という意味で見捨てるのではなくて、「(その影像は)もはや存在しない」という意味で見捨てるのである

32 なお、あの詩人(ホメロス)はヘラクレスについて、彼が神々の世界に住むという説と冥府に住むという説をともに正論とする必要にせまられて、「ヘラクレス自身は神々の世界に住むけれども、彼のエイドーロン(幻)は冥府にある」とすることによって、そのエイドーロン(影)を分離しているように思えるのである

34 そこで、この話は、次のように考えれば、信憑性のあるものとなるであろう

36 つまり、実践面ではすぐれた人であったが、全体としてあの世界に居を占めるために必要とされる観照の面では、すぐれた人とは言えなかったので、彼は上の世界に居を占めるとともに、その一部は、なお下の世界にも居を占めているのである」と

13

1 ところで、以上の事柄について考察をすすめてきたのは、われわれだったのであろうか

2 われわれだったのである

3 だが、「魂によって」とは、どういう意味なのであろうか

4 いや、「われわれが魂である限りにおいて」である

5 そうである。

5 われわれは魂に次のような動を、すなわち肉体のもつ動ではなくて、魂自身の生としての動を認めなければならないのである

8 なぜなら、知性もわれわれの部分であるし、われわれはその知性へと昇っていくのだから

2 それとも、魂だったのであろうか

2 しかし、われわれが魂によって考察したのである

3 はたして、われわれが「魂を持つことによって」考察したのであろうか

4 してみると、魂は「動く」ことになるのではなかろうか

6 それにまた直知の働きも、次のような意味で、すなわち「魂は知性的なものであって、魂が直知の活動を営むばあいでも、知性がわれわれに作用を及ぼすばあいでも、その知性の活動がわれわれのすぐれた生である」という意味で、われわれに属するのである